オイリーカートに学ぶ
インクルーシブ・シアター
報告書

ＴＰＮドラマ教育ライブラリー6

編／発行　特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク
助成　日本財団

もくじ

はじめに・・・・1

第１部　ドキュメンテーション・・・・5

セミナー・・・・6
ワークショップ点描—東京・・・・19
ワークショップ点描—仙台・・・・30

第２部　オブザベーション・・・・47

日本への思い　ティム・ウェブ・・・・48
オイリーカートの魔法　多田美紀・・・・51
「人間愛」～オイリーカートの魔法　落合咲野香・・・・54
教育でも、福祉でもない楽しさ　金親　浩一・・・・58
ホスピタルシアタープロジェクトの挑戦　　黒田志保・・・・60
インクルーシブされる側　谷口直子・・・・65
丁寧で配慮ある関わり　佐藤一恵・・・・69

後記—大きなムーブメントへ・・・・70

はじめに―美しい体験を希求して

1998 年に立ち上げ、2000 年に NPO 法人化し、自転車操業ながらも、シアタープランニングネットワークは走り続けてきました。当初、俳優トレーニングとともに、英国のドラマ＆シアター教育を紹介し、指導者を育成する事業にかなりのエネルギーをつぎ込んでいました。長く続けるなかで、関心も高まり、それなりに担い手も増え、広がりを見いだせるようになりました。

しかし、次第に、気づくようになったのは、教育のコンテキストで、演劇を道具化することで、鑑賞そのものが失われるのはやむを得ないという風潮が生まれていることでした。演劇という体験の道具を用いることで、教育的目的を達成できれば、「鑑賞」という体験は必要がない。見たことがなければ、想像することもできないにもかかわらず…。また、耳にしたのは、芸術性を重視することは意味がない…。

さらに、成果を求める社会ゆえでしょうか、教師のなかでは、できる子をさらにできる子に育てる、英才教育への視点が広がり、弱者と寄り添い、高めていく英国のドラマ＆シアター教育のエッセンスが抜け落ちていくのを見るようになりました。

自分のなかのドラマ＆シアター教育への思いが少しばかり揺らぎ始めた頃、病気や障がいのために劇場で観劇できない子どもたちのために演劇を届ける事業に着手しました。2010 年のことです。健常児の鑑賞機会も減っている現実は、しばしば児童演劇の業界のなかで議論されてきましたが、病気や障がいをもつ子どもたちへの視野は、文化政策においても、業界においても、抜け落ちていると感じていたからです。限られたアーティスト、とりわけ、クラウンによってのみに担われ、そこに「演劇」は殆ど存在していなかったのです。

ワークショップリーダーの資質をもって、参加したアーティストらとの議論につぐ議論、思考錯誤を繰り返しながら創造を行い、大きな病院から小さな放課後ディサービスまで、多くの子どもたちと出会ってきました。真摯なまなざしと笑顔と出会いながらも、継続性を許してくれない助成制度への不満、同時に、芸術的にも何かが足らない、何かが違うという違和感は募るばかりでした。演劇だから物語を伝えなければとい

う思いや、アップリフティングのための即時的な笑い…。日本の現代演劇の縮図のようにも見えますが、プロデューサーとしての私が希求していたのは、詩的な「美しい体験」でした。しかし、それをカンパニーのなかで分かちあうことができない、見たことのないものは想像することもできなかったのです。児童演劇の宿命ですが、劇場で一般公演として上演されることが少ないために、アーティストですら、多くの観劇体験を持ちえないのです。

そんな折に、2012 年に出版された劇団オイリーカートの 30 周年史を入手したことから、2014 年 10 月末、南ロンドンの小学校の一角にあるオイリーカートの事務所（稽古場、ワークショップ）を訪れました。

劇団オイリーカートの名前は、三原キッズステーションとの活動を指導したレイチェル・ベッツ女史が、劇団のレジデンス研修に参加したことも含めて、何度も耳にしたことがありました。ただ、ドイリーカート D'Oyly Carte とどういう関係があるのだろうとは思いながらも、不思議と、調べたりはしませんでした（この回答は、今回、ティムが語っているのを耳にして、苦笑。意識しての命名だったそうです）。ちなみに、ドイリーカートは、19 世紀末の英国の興行主で、ミュージカルの祖ともいわれるギルバート＆サリヴァン・オペラ（通称サボイ・オペラ）を生みだしたプロデューサーで、実は、私の卒論のテーマでした。

ティム・ウェブ氏との実りある議論で幸せな気分を味わい、そして帰国後、頂戴した DVD 映像を見て、その美しさと寄り添う姿勢に驚き、ため息をつきました。求めていたものがここにあったのです。そして、手厚く寄り添うことと、芸術性の共存は不可能ではないと確認しました。

しかし、同じことが日本でできるのか？

以来、事ある毎に、DVD 映像を紹介することに務め、少しずつ理解者を増やしてきました。そして、2016 年 3 月、『妖精の国』オープンディとして、こども教育宝仙大学で上演を行いました。オイリーカートの実践の私なりの理解と、英国の劇場で広がるリラックス・パフォーマンス、イマーシブ・シアターの実践を織り交ぜたもので、それなりの評価を頂いたものの、改善すべき点がより多く浮かびあがりました。それをどう解決すべきなのか？

解決すべく動きだせよと背中を押すように、オープンディのさなかに、日本財団から、今回の「オイリーカートに学ぶインクルーシブシアター」の助成内定の通知を頂戴したのです。

東京では、多様な層から、遠い地域からも参加者を得ることができました。参加者同士の交流も重要な成果です。新しい試みが生まれて来ることを期待しています。仙台では参加人数こそ限られていたものの、むしろ深く学ぶことができように感じています。二つの都市で、ティムとアマンダの溢れんばかりのエネルギーと優しさ、暖かさ、遊び心が、それぞれの地域で、それぞれの活動で、悩み、迷う参加者たちを勇気づけるのを目撃しました。主催者として、通訳としての至上の喜びです。

手前みそではありますが、色んな意味で贅沢なプログラムだったと思っています。このような贅沢なプログラムを提供可能にして下さったのは、日本財団の手厚いご支援です。紙面を借りて御礼申し上げたいと思います。

また、仙台でのパートナーNPO 法人アートワークショップすんぷちょの代表理事で、教え子でもある及川多香子さんのがんばり、障がい者に芸術のある暮らしをもたらしたいと様々な活動を展開しておられるシャロームみなみ風の施設長廣川美也子さん他、施設のスタッフの気配りに心より御礼申し上げます。

いま私は、この報告書をまとめる作業を続けながら、様々なことを考え、さらに考えあぐねてしまっています。

2020 年の東京オリンピック／パラリンピックに向けて、障がい者芸術への関心の高まりを見せるものの、そして、障害者差別禁止法の施行により、身体的な障がいへの配慮が模索され普及し始めたものの、知的障がい児／重度重複障がい児のための鑑賞機会にはなかなか至らない。

子どもの芸術体験の重要性は語られるものの、文化政策が見つめるものは、「教育的価値」「表現力」「コミュニケーション力」に留まり、子どもの、そして、障がいをもつ人々のありのままの生と、生きる喜びという視点を欠く。強いものが勝てばいい、見える成果を上がらなければだめという政策の意図が見えてきます。そこに、抜本的に、人権という思想、哲学が存在していないのです。

一方、演劇の現場でも、大人視点で作品が作られ、経済の視点から無理強いが行われている。演劇はかくあるべきものというコンベンションが根強く、じっとしていられない、声を出してしまう子どもを、「親のしつけが悪い」と排除してしまう―ひとつの光明は、近年、世界的なベ

ビー・ドラマの広がりにより、日本においても、乳幼児の特性を理解した作品の創造と提供が始められていることです。

「英国だからできるんだ」とは言いたくない。このような発言は、オイリーカートの 35 年間の努力を踏みにじるものになってしまいます。彼らがどれだけ批判され、揶揄され、困難にぶつかってきたのか。英国の文化政策ならびに演劇社会史の学徒としては想像に難くない。それでも、続けてきたからこそ、あきらめなかったからこそ、いまのオイリーカートがあるのだと思っています。追いかけていきたい。

遠い昔の幼い頃、ある日、医師だった父が、夜、竹ひごを使って飛行機を作っているのを見かけました。
「病院の体育館でね、長期入院の子どもたちを遊ばせてあげるんだ」。

この父の言葉が、個人的には、ホスピタルシアタープロジェクトに携わることになった私の原点です。子どもの心に寄り添い、子どもと遊ぶ。当り前のことが当たり前でない残酷な社会のなかで、ささやかかもしれませんが、美しいホスピタリティを届け続けられればと願っています。

中山　夏織
NPO 法人シアタープランニングネットワーク
代表理事

出来得るかぎりのドキュメンテーションに尽くしましたが、東京でのセミナー、ワークショップの録音ーとりわけ、重要な講師と参加者のディスカッション―に支障があり、採録できておりません。お詫びいたします。その分は、参加者の豊かなオブザベーションをご参照いただければ幸いです。

第１部

ドキュメンテーション

セミナー

東京

日時　2016 年 10 月 7 日（金）18：00－20：30
会場　シャロームみなみ風　地域交流ルーム
通訳　飛田　勘文

仙台

日時　2016 年 10 月 14 日（金）18：30－20：45
会場　宮城野区中央市民センター　第一会議室
通訳　中山　夏織

以下の記録は、仙台でのセミナーをベースに、一部、東京でのセミナーで話された内容も加え、編集しています。

ティム（T）:こんばんは。私もアマンダも、日本は初めてです。すばらしい時間を、東京と京都で過ごすことができました。私どもの劇団をご紹介できることは光栄です。拠点はロンドンです。英国全土を巡回し、海外でも活動を行っています。アメリカ、ロシア、そして、今回、日本にも、お招きいただきましたが、まだこれらの国々で上演したことはありません。

私たちの演劇は、感覚を使う演劇です。通常の演劇に対応できない人たち、座って観ることができない人たち、聞こえない人たちであり、全ての観客を対象としているわけではありません。見えない、聞こえない言語の障がい、とても幼い、具体的には、2 歳以下の子どもたちにも演劇を作っています。このような子どもたちのためには、特別な演劇を作らなければならないのです。言葉も学んでいない場合もあります。彼らの脳は、他の人たちと異なっています。芝居が終わったときに、その最初を覚えていられない人たち、新しい人と出会うのが怖い人たち、新しい場所が嫌いな人たち―自閉症スペクトラムですね、自閉症の子どもたちは、新しいものが苦手なんです。そのために、不可能な観客と呼ばれます。でも、不可能ではない、いかなる観客でもコミュニケーションの

方法があるはず、それを見つけたいのです。

私たちの劇団の運搬車には、「あらゆるタイプの子どもたちのためのあらゆるタイプのショー」と書いてあります。35 年前、劇団をたち上げ、幼い子どものために演劇を作りはじめました。1980 年当時、そんな小さな子どもたちのための演劇なんてできない、集中できないし、いつもママのところに走っていっちゃうと言われました。でも、そうじゃない。私たちはうまくいく方法を見つけるのです。映像を観て下さい。これは、2 歳から 5 歳を対象としたショーです。（映像）

１つの部屋から始まります、子どもたちはそこで遊んでいて、その後、異なる部屋に移動します。そこで物語がはじまり、もっと集中できるようになっています。そこで、『ジャンピング・ビーンズ』というお芝居が始まります。

アマンダ（A）：子どもたちも衣裳をつけているのがわかりますよね。

Ｔ：子どもたちは、この小鳥の赤ちゃんのために巣を作ってあげるのです。ところで、みなさんに質問です、どんな風に子どもたちは座っていましたか？

参加者：円になって

Ｔ：お母さんたちは？

参加者：後ろにいました。

Ｔ：他には？　お母さんやお父さんが近くにいましたよね？　人形も。

俳優の質問によって、子どもの反応が変わります。小鳥に何か必要？と聞いたとき、例えば、ある子どもはピーナッツと応えました。「飛べるの？」と訊く子もいます。その場合、「まだ赤ちゃんだから飛べないんだ」と応じていく。どうやって巣に入れてあげるのか。今までで一番ユニークなアイディアは、「教室の流し場の水を出しっぱなしにして、教室を水で満たせば、籠が巣まで届くんじゃない！」という 4 歳の子の物語でした。子どもたちがショーを作るのを助けてくれているのです。だから、子どもたちのおしゃべりに気をつけていなければならない。ただ、あまりに幼いと話せません。例えば、赤毛のこの女の子は話せません。でも、素敵なものをもっていて、巣の中に入れてあげたり、ベルを見つけて遊んでいます。2 歳～5 歳児の場合には、観客の数は、両親を含め 20 名です。

障がい児のための演劇ー多感覚演劇

様々な障がいを抱える子どもたちのための演劇も創造しています。英国では、障がいを 2 つのカテゴリーに分ける傾向にあります。

その 1 つは PMLDー重度重複障がい、その中でも 3 歳～19 歳が私たちの対象です。殆どの子が言語を使えません。動くのも困難で、車椅子を使っています。知的障がいを伴うこともあります。この子たちの場合、記憶が残らない、理解するのに時間がかかることがあり、それを創作の際に配慮しなければなりません。

もう一つは自閉症です、見えない、聞こえない等の問題はありません。動けるし、話もできます、問題は他の人とコミュニケーションできないことです。心配してしまう。同じ事を繰りかえして行う傾向があります。

そこで、私たちが用意するのが、多感覚演劇です。彼らが理解できる形に創作していきます。決して、レーベルにしたいわけでも、カテゴリー化したいわけでもありません。というのは、障がいは多様だからです。子どもは、一人ひとり違うのだと考えているのです。

例えば、自閉症児が、椅子の色をみて、誰かの顔よりも、椅子の方に関心を示す。人々の顔が一番面白いもののはずなのですが、人は複雑すぎるのです。自閉症児は 1 つのことに集中する。人に会うと話をしなければならない、でも、それが苦手で、不安になり、走り回ってしまうのです。音を出したり、ぶつかったり。そんな走り回りたい観客のために、それでは、どんな演劇を作りましょうか？　全ての感覚を使う演劇を作るのです。殆どの演劇は見て、聞くものです。私たちの演劇は、触って、嗅いで、味わって、身体運動、身体で体験するものなのです。

（映像）この映像の中ではトランポリンを使っていて、観客が横たわっています。想像してみてください、視覚・聴覚障がいだとしたら、他に。

参加者：触る、匂い。

Ｔ：もちろん、トランポリンは優しく動かしてあげます、時には、激しくするときもあります。子どもに反応していきます。何を望んでいるの

か。自閉症児は、触ることが大好きです。それ以上に好きなのは、身体運動なのです。だから、トランポリンを取り入れました。時に、幼い子たちが跳ねまくるのです。

もう一つの特徴は、俳優と子どもたちが、とても近い関係にあるということです。子どもたちの中には、距離の近いのを好む子がいる。この映像の女の子は水の中に浮いているのですが、右側に俳優が寄り添っています。この距離がとても大切なのです。そして、全ての感覚にクローズアップしていくのです。

この映像『ブルー』は、いまお話したような子たちのために作ったショーです。自閉症や PMLD です。このショーでは、事前に、全て子どもたちに対し、これから行くのは駅だと、と伝えました。電車に乗るので、何か大きなカバンを用意して、その中に一番大切なものを入れてくるようにお願いしました。子どもたちは、劇場に来る前から、何が起きるだろうかと、考えることになるわけです。情報を理解するのに時間がかかる子の場合は、1 日かかることもあります。

そして、駅ー劇場ーに着くと、動く椅子がある。ロッキングチェアーやハンモックです。注目して欲しいのは、この自閉症の男の子です。チェアーに座りたくないので、舞台の真ん中に座ります。俳優は、カバンはちゃんと持ってきたかなと確認します。そしてカバンの中のものを見

せます。舞台の真ん中の男の子は、自分の世界の中にいます。ショーが始まっても興味をもってくれません。俳優を見ない、何か俳優が本当に面白いことをすることで、初めてひきこむことができるのです。その瞬間を映像でみてください。これは俳優のジャックです、これは自閉症の男の子ゾウゾウです。

俳優のカバンの中に入っている大切なもの、これはシェイカーです。ゾウゾウは、このとき初めて見てくれました。でも、まだ面白くなさそう、ジャックのカバンを開けると、井戸のポンプが出てきました。カメラも入っています。（俳優は、映像でゾウゾウと歌う）

さて、皆さん、ゾウゾウを変えたものはなんだったと思いますか？

参加者：カメラ？

Ｔ：もう少し前

参加者：泡！

Ｔ：そうです、ゾウゾウは、泡が大好きだったのです、でも、ジャックは、それを探らなければならなかった。ゾウゾウと泡で遊んだことで変わったのです。そして、ショーの終わりには、皆で歌を歌いました。子どもの名前を織り込んだ歌です。話すことができない子でも、自分の名前は理解できます、その歌は、自分のものなんだと思う、そして、プロ

ジェクションを使うことで、みんなが見合うことができる、お互いにね。その瞬間、その子ひとりのために、みんなの愛情のすべてが向けられるのです。例えば、この公演を学校でやるとしたら、事務の人、給食のスタッフなど、学校のみんなが観るのです。子どもの名前を織り込んだ歌は、殆どのショーで使っています。

学校に行く前や、子どもたちが劇場に来る前、本番の前に、「ソーシャルストーリー」と私たちが呼ぶ資料やビデオを用意します。学校では、学習障がいの子どもたちに対し、新しい経験を、準備させるために使います。登場人物の衣装、話し方、関心事などを紹介し、参加してもいいし、観ていてもいいよと、事前に準備させてあげる、どんな風に参加するのか。準備することによって、もっと楽しめて、新しいことが怖くなくなるのです。

準備することで期待を高め、モチベーションも高まります。ショーには、音楽があり、綺麗な装置がある、素敵なことがたくさんあるのです。ダンスやゲームもね。それらは全て何か五感を刺激するものです。言葉を使えない子たちが話したくなる、人と会わなければならないことに参加したくない子でも、他の子たちと遊びたいとなるわけです。それは楽しいことを明らかにしていくことであり、社交性を高めるためには必要なことなのです。

参加者：味覚はどのように使うのですか？

Ａ：健康のため、味覚はあまり使いませんが、クリスマスの作品でゼリーを使ったことがありますし、『ブルー』では、準備の段階で、パンケーキを料理して、食べさせました。

限定された観客数と保護者の支援

Ｔ：次に、お話しするのは、聴覚視覚障がいの子どもや、車椅子の子たちの、身体運動的をどのように促進させるかです。さて、これはハイドロセラピープールです。温水で、お茶の中みたい！　身体が動かない子どもにとっては、冷たいのはだめなのです、プールの中では、異なる感覚や動きを取り入れています。（映像）

演奏していた楽器は、オーストラリアのディジリデュといって、アボリジニの楽器です、低い音が出せます。低い音は、よく聞こえない子どもにとって、身体で感じることができるのでよく使います。ベースやチューバなどです。触れると振動が伝わるからです。胸に当てれば、身体に振動が伝わります。背骨の上から下へ、刺激をもたらします。このようなことが役に立つと考えています。このショーにはインドネシアからのガムランもあります。この男性は、この作品のために作曲をしてくれました。

参加者：どれくらいの子どもたちが楽しめるのですか？

Ｔ：1 セッション当たり 2 人の子どもで、1 日当たり 8 セッション、計 16 人の子どもたちに接します。これは非常に例外的ですが。ハイドロプ

ールは大きくないので、人数に限界があります。その前の映像のショーは、6 人の子どもたちとその保護者や先生です。

私たちにとっては、保護者も重要な要素だと考えています。保護者の方々は助けて下さいますし、子どもの好きなものなどを教えてくれることもあります。また、何か笑顔をしてくれるだけで方向性が正しいかどうかを教えてくれるのです。

人数については、例えば、スピーチ・セラピストが、学校で 30 人を相手に仕事ができるでしょうか？　障がい児と接するためには、特別な方法が必要ですよね？　また、教師や親が一緒にいなければならない理由は、何が起こったかを彼らがみてくれるのです。日常を知っているから、気づける。どのようにアイコンタクトをしたか覚えていますか？この子が音を出したり、手をつかんだことを知っていますか？　普段を知らない私たちにはわからない。先生や親は、普段、彼らがやらないことを知っているのです。でもショーに刺激されて、何かをすることがある、そのことが、すごいのです。演劇は非常に大きなイベントです。リアクションが大きくなる。学校はお金の価値に変えられないと考えてくれるのです。

Ａ：もちろん、多額の助成に支えられての活動です。アーツカウンシルからも、民間の助成団体からも支援を受けています。資金調達のために多大なエネルギーを費やし、多くの実績書類を作って。評価も行い、公

開していくことで、民間の助成財団が支援してくれるのです。
Ｔ：ワークショップでは、どのようにショーをつくるか体験して頂きますが、実は、殆どお金をかけないで時間をかけないで行うことは可能なのだと考えています。
参加者：素晴らしいプログラムですが、いくら払って子どもは参加するのですか？
Ｔ：学校で 1 回上演するには、約 2000 ポンドかかります。学校からは 900 ポンド支払って頂きます。子どもは支払いません。劇場では親が払いますが、チケット収入では経費をカバーできません。チケット代は、通常 8 ポンドです。
参加者：活動のモチベーションは？
Ｔ：難しい質問です。実は、誰もが障がいを持っています。でも、特別な学校に通っている子は、それが明白なだけなのです。普通の人にとっても、他の人を理解すること自体も難しいことですよね。障がいのある子どもたちは、私たち以上にコミュニケーションをとることに困難なのです。だから、コミュニケーションを可能にしようと考えたのです。
Ａ：私たちにとっては、演劇を作ることが大切なのです。劇団の創設前から、色んなタイプの演劇を作ってきました。子どもが好きだから、このような活動を選び、それにより満足感を得ることができました。
Ｔ：これまで 80 作品創ってきました。そのうち 30 作品が障害者向けです。さて、お部屋やプールの作品をみていただきました、次はトランポリンです、この作品では動きの感覚を得ることができます。（映像）
参加者：怖いと感じてしまう子にどのように接していますか？
Ｔ：怖がったりします、例えば、このショーではトランポリンから落ちるのではないか？とか。その場合は、とっても優しく、小さな動きから揺らしていきます。他の全ての作品でも、子どもたちを注意深くみてリアクションをとっていきます。それにパフォーマンスをあわせるのです。子どもたちが求めるものに変えていくのです。そうすると、リラックスできます。ショーのあいだ中、ショーはずっと変化しているのです。
Ａ：床の上でもできるようにもしています。
Ｔ：この作品では、スクリーンやボールが降りてきました。とても近い距離です。色彩は、黒と白。私たちに求められるのは柔軟性なのです。

参加者：殆ど短編ですか？

Ｔ：『ブルー』は 50 分、トランポリンは 25 分、プールは 20 分です。

参加者：俳優は特別なトレーニングを受けているのですか？

Ｔ：様々な俳優を雇っています。演劇学校を出たばかりの人、音楽家。とりわけ音楽家は技術力のある方を雇います。なかには、10 年以上一緒に活動している俳優が 2 名います。

鑑賞を可能にする環境の整備

Ａ：35 年前、オイリーカートは、3 人で活動を始めました。もう 1 人は音楽家のマックスです。ティムが台本を書き、演出し、私はデザインを担当するとともに、「ソーシャルストーリー」を作ります。

併せて、私が考えなければならないのは準備です。それぞれの段階で何をしなければならないか？　教室から公演が行われるところまで、どう道筋をつけるのか。私たちはその部分もショーの一部だとみなしています。舞台上でパフォーマンスすることもありますが、そこまでのアプローチがとても重要です。まずは、美術や音楽を事前に紹介します。ショーの一部や要素を紹介するのです。劇場の公演でも、ロビーに装置の小さいバージョンを置き、パペットがロビーでお客さんに挨拶するので

す。一緒に劇場に入ろうよと。

プールの作品では、赤と緑をメインカラーにしました。画像の男の子は、赤いガウンを着ていて濡れていないエリアにいます。教室からプールまで、この装飾がずっと続いています。ここにはビーズのカーテンでテントが作られて、中が見えるようになっています。中に入ると包まれているような感覚になります、閉ざされた感じはしません。ビーズの音がします。このようにして、ショーの紹介を事前に行うのです。

もうひとつ大切なのは、子どもの自由です。１つの椅子を置いて、子どもたちがいつ来てもいいようにする。ショーのあいだにパニックになったら、ここが逃げ場として使われます。ここで落ち着かせてから劇場に戻るのです。その椅子は弾んだり横に振ったり、揺り籠のようにもできます。特に、頭を動かせなくても、椅子を回せば見えるようになっています。

これは屋外の作品で、『ブルー』という作品の一部です。大きなフェスティバルでお金を集め、一週間２人のアーティストを学校にレジデンスさせました。まるで、ここに住んでいるかのように。電車を待っているという設定です。先ほど、パンケーキを料理したことがあるとお話ししましたが、障がいをもつ生徒たちと馴染むための仕掛けです。そして、歌を歌い、ショーのことを話し、電車に乗るとどうなるのかなど、子どもたちと触れ合うことをします。劇場で上演するときには、子どもたちは俳優に馴染んでいますので、「見つけた！」といって走りだしました。その様子に先生の方が驚きました。

客席の配置も作品によって異なります。これはトランポリンです。これは、これまでの中で一番大きな作品です。6 つのペアの椅子があって、大きなフレームに椅子をつっていて、昇降したり、回ったり揺れたりします。3 カ所で、俳優がアクロバットをします。動きの一部を、観客の椅子も真似をします。

これは『チューブ』という作品で、チューブは低い音を出すことができて、振動が伝わります。それぞれの俳優は 2 人の子どもとかかわります。

次は、感覚演劇です。どれだけ俳優と観客が近しい距離にあるかがわかります。『ローズ』という作品は、赤い旗を使ったショーですが、この俳優はバラです、美しい香りを出していることに誇りをもっています。子どもたちはスクリーンに興味をもちますので、そこにスパイスを入れる。後で、スパイスをすり潰して香りを出すのです。それを音楽に合わせて行うのです。そして、それを小さな袋にいれて子どもたちに持たせてあげます。

『バブル』という作品では、子どもたちに触れないようにエプロンを着せて、泡と一緒に遊びます。この映像の子どもは「またね」といいました。過去一年のあいだで、初めて声をだした瞬間だったそうです。

こちらは鳥の作品です、登場人物はオウムです。種が好きなんです。ボウルの下に照明を仕掛け、ついたり消えたりします。そして、種が音をたてる。子どもは、これで色んな方法で遊びます。

これは『チューブ』という作品。チューブのランタンで中にストローが入っています。きれいな音をだします。近い距離でドラムのように遊んでくれます。こんな感じです。

参加者：何をもって、

これらを演劇とするのですか？

Ｔ：誰が定義するかによります。大学は私たちの活動を応用演劇と呼ぶかもしれませんが、私たち自身は演劇と呼んでいます。観客のためにショーを創造しているからです。通常の演劇では、このような子どもたちには、つながりえないのです。英国では感覚演劇と呼ぶようになり、いま新しい劇団も育っています。

参加者：必ず物語があるのですか？

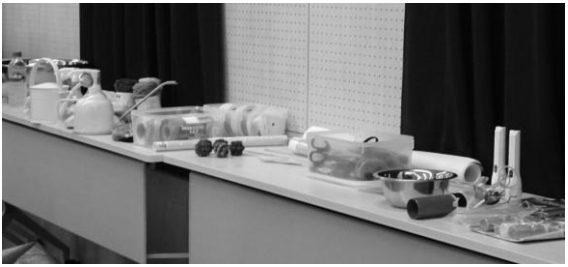
Ｔ：あったり、なかったりです。PMLD や知的障がい児には、ショーの終わりには最初に何があったか覚えていられない場合があります。その子たちは瞬間に生きていて、常に何が起こるか気にしています。だから、一般的な物語を理解することは難しい。だから、美しい関わり方の連なりを創るのです。優しくスタートして、過程で自信を持たせてから、少し暗くする。はじめから暗くするとパニックになるからです。最後には、名前の歌を使って、全体を静かにして、変化をもたらすのです。これが基本のフォーマットです。

テープ起こし　及川多香子

文責　中山夏織

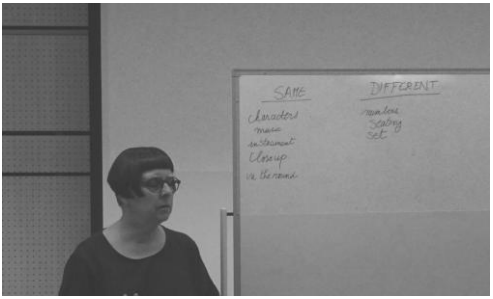
ワークショップ点描
―東京―

日時　　2016 年 10 月 8 日（土）～10 日（月・祝）
会場　　シャロームみなみ風　地域交流スペース
通訳　　飛田　勘文
参加者数　18 名



第１日目

1.　オリエンテーション／様々なウォーミングアップのゲーム。



アマンダが説明する健常児向けと障がい児向けでの作品の違い

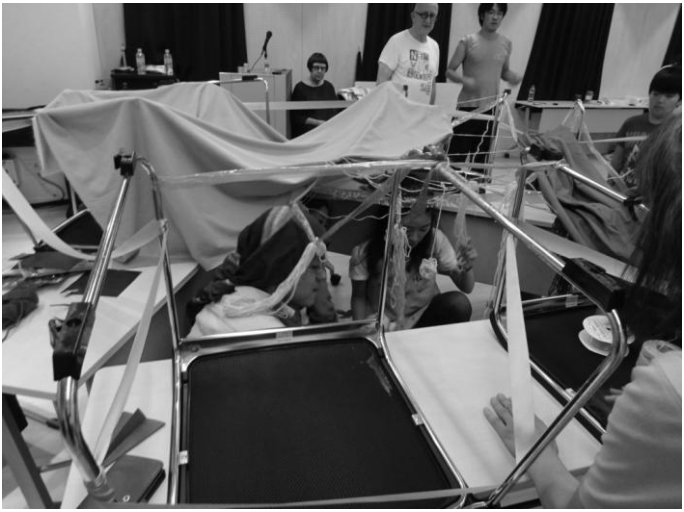
同じ	違う
キャラクター	観客の数
音楽	客席の組方
楽器	装置
クローズアップ	間
即興	準備
音楽家＝指揮者	名前入りの歌

2.　子どもを招いての実験ワークショップ―子どもは何に反応するのか。

4 グループに分かれ、指定された道具を用いて、4 分間のシーンを作る。

1. リボンと構造物
2. 音楽
3. ブルーシート／シャボン玉
4. テント／トーチ

テントは魅力的な素材。



秘密基地出現。

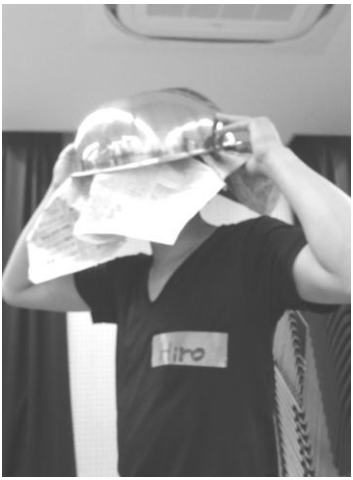
怪しげな生きもの？

シャボン玉と遊ぶ。

3.　特定の感覚を強調するためにオブジェクトを使う。

第２日目

4.　「ブラシ」と「紙」を用いた多感覚演劇を作る―施設利用者のためのトライアル・パフォーマンス



様々な感覚の面白さを探るとともに、障がい児に向き合い、クローズアップのための「テーブルトップパフォーマンス」を探る。

5.　施設の居住エリアでのトライアル・パフォーマンス

施設職員のオブザベーション

- 折り紙でこんな豪華な感じになるなんて驚きました。
- 視覚で惹きつけてから、その後、音に集中するのが望ましいと思いました。
- 弱視の方が、普段あまりものに興味を示さないのですが、よく見ていました。

6. パフォーマンスを作る―ワークショップ・スペースでの公演準備

トライアル・パフォーマンスについてのディスカッション

- 観客にクローズアップしていたために、全体が見れていなかった。→全体が見えなくても問題ない。知的障がいをもつ人と活動するためには焦点を当てることが何よりも大切。
- パフォーマーと音楽家との関係－集中を妨げないように交互で動く。
- オブジェクトを一緒に振ってくれたが、職員にダメだと取り上げられてしまった。→観客に渡せるものの数を増やしたほうがいい。
- 教師・職員への事前説明が重要。
- 言葉を理解できない方に対しても、しっかり話しかけ、音をだしてあげる必要がある。
- 嫌な顔をされたら、別のことを試してみる。
- 今日までこんなシンプルなことで喜んでくれるのか疑っていたが、やってみて、「シンプルでいいんだ」と驚いた。→ シンプルが最も難しい。どんどん削いでいき、無音のところ、動きのないところを作ることが求められるのだが、それが難しい。
- スペースが狭く、次のテーブルの方がすでに関心を示してしまった。→ 配置は重要。
- 1人と関わっているとき、全体と関わっている時のバランスが重要。
- 障がい児向けの作品を作る時、5 週間かけて作品を作り、プレビューを行い、その後、3 か月ばかり寝かしておく。作った作品に対して、客観的になれるから。

本格的な演出モードに突入。

第３日目

7.　小道具製作・リハーサルは続く

8.　施設職員の前でのプレビュー

施設職員のコメント

- 凄く触りたくなる感じ。
- 昨日よりも明るく盛り上げっているのが良かった。視覚的な刺激があるといいです。
- 音も視覚も惹きつけられている感じで楽しかった。

オイリーカートのコメント

- 足元の新聞紙の靴がいい音をだしていた。
- 音を出すとき、テーブルトップパフォーマンスをするとき、まず自分から音を出す。そして、子どもが同じ音を返す、その音をまた返すことが発展につながる。
- テーブルトップパフォーマンスの際、何かをすると見せた後に、アイコンタクトを取って、「これやっていい？」という合図を送る。子どもが嫌そうな場合にはやめ、別のアプローチを考える。子どもに選択肢を与える。許可を得ることで、尊敬の念を示す。
- 紙のグループは、強く叩くと銅鑼のような音がするので、もっとたくさん入れたほうがいい。

9.　パフォーマンス―成果を分かち合う

施設利用者のみならず、子どもたちを招いて、2 回のパフォーマンス。

オイリーカートのコメント

- 素晴らしい時間。才能に溢れた皆さんでした。特に、2 回目のパフォーマンスは魔法のようでした。皆が調和し、魔法にかかった。部屋の中にいる誰もが幸せだったと思います。ですが、利用者や子どもたちがいなければできなかったことです。
- 紙の女王の瞬間、誰もが静かになって、とても美しかった。

施設職員のコメント

- 私の担当した利用者の方々は自閉と知的障がいで、受ける感覚がバラバラですが、自然と笑顔で参加したり、ポカーンとした表情の方もいました。それでも、落ち着いて席についていたのは、作品が魅力的だったからだと思います。
- 今日が初めての利用者さんと、昨日も見た方とは反応が違いました。初めての方は反応が固い。2 回目の方はとても楽しんでいた。と言うことは、繰り返していくこと、経験を積んでいくことで、心の窓が開かれるのだと思いました。若い層はものすごく楽しみました。今頃、掃除しながら、「ブラシ」と歌っていると思います。

ワークショップ点描
―仙台―

日時　2016 年 10 月 15 日（土）～17 日（月）
会場　宮城野コミュニティセンター(15 日、16 日)
　　せんだい演劇工房 10-BOX　box3 (17 日)
　　成果パフォーマンス：仙台市なかよし学園あおぞらホーム
通訳　中山　夏織
参加者数　9 名

第１日目

10. オリエンテーション／様々なウォーミングアップのゲーム。オブジェクトと感覚を遊ぶ

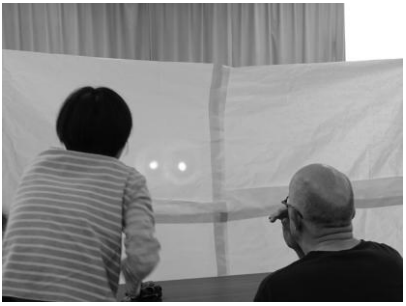
ボウルを他のものにみたてる

ストローの感触

霧吹きで

ビニールシート

11. 子どもたちのためにテーブルトップパフォーマンスを準備する



紙とトーチを使って

毛むくじゃらの生きもの

シャボン玉

12. 子どもたち登場

ディスカッション

参:子どもの反応が新鮮で楽しい。その反応を取り入れて、こちらがレスポンスできると良くなると思った。

T:コントロールするのではなく子どもが遊べるようにしたことで、彼ら自身が参加しようとした。年齢層が近い方がやりやすいです。

参：傘に絵を描くことを、子どもが自らやるとは思っていなかったので、驚きました。

A：ショーの年齢と能力がリンクしたから起こり得たことです。今日、どんな子がやってくるのか知りませんでしたから、合うものも合わないものもあった。シャボン玉は幅広い年齢に魅力的です。

参：自由に遊んでいるところを見ていると、何が好きなのかがわかった。

T：この子どもたちとまた一緒にできるとさらに良いプログラムにできます。ダイキさんの無表情がバスターキートンのようでよかった。ゆっくりとやってくれたこともよかったです。

参：子どもが演出し始めたのが面白かった。

T：子どもが演出できることも重要です。ショーの後、両親や教師と話し、いつもはどんな様子かを訊きます。よく「この子は何ができて何ができない」と決めつけがちなのですがショーを見ていると、インタラクティブな要素から、子どもはもっと複雑な能力を示します。日常生活とは異なり、ショーに対するリアクションは普通じゃないのです。

参：子どもがカートのタクシーに乗るより、押すほうを望んだのが面白かった。

A：面白そうなことは真似したがります。

（次頁に続く）

参：予定通りにいかないことがあると思うのですが、その都度、リアクションして楽しむのでいいのですよね。
A：そうです。もっと時間があったら、違う楽器でというアイデアもあります。リハーサルでは私たち自身が子どもの役をやります。子どもはどんなことを考えるのかを考えるのです。
T：教師が自ら体験していないひどいことを、子どもにやらせている場合もあります。だから、自分で試す必要があります。
A：子どもはいつも驚くべき存在です。ある作品で、8 歳の子ども 6 人が観客だったのですが、1 人の女の子が走りまわっていて、ダブルベースの音楽家の楽譜を、突然食べてしまいました。音楽家は指揮者の役割をしているので、順番がわからなくなると大変なのです。
T：プールの作品では、水中の子どもが楽譜を水でぐちゃぐちゃにしてしまいました。ジャズの音楽家は、ハプニングに色々反応してくれ

るので好きです。必ず、音楽家を１人入れますが、音楽家の能力は高くなくてはならない。とりわけ、使いたいのは大きくて低い音の出る楽器です。聞こえない子どももお腹で感じられるからです。
Ａ：カンパニーの構成としては、男女比も人種の混合も大事です。
Ｔ：私どもの俳優の中にマークという名の背の高い黒人男性がいます。低い声の持ち主ですが、学習障がいがあって、特殊学校に通っていました。読み書きはできませんが、強い共感力をもっています。彼は他人がどう感じるかをつねに気にしています。自分の幼いときの経験をもとに、観客に話しかけるのです。誰も批判しない。多くの問題を抱えていますが、素晴らしい声の持ち主なのです。

第２日目

13. オリエンテーション／参加者の入れ替わりがあり、改めて自己紹介。

14. ソーシャルストーリー／パフォーマンスの構成

Ｔ：　映像を見ていただきます。劇場空間に入る前、教室に作品の一部を用意しておきます。子どもがアイパッドを持っていますが、中にはソーシャルストーリーの情報がインタラクティブに提供されています。キャラクターが話しかけて来る、そうしたら応じることができる、ということを劇場に入る前に体験し、準備するのです。パニックになったら、この教室に戻ってきて、休んで落ち着いたら戻っていく。
　この巻き紙のような長い紙には、プログラムの流れ、シーンの展開が文字ではなく、絵で描かれています。シンプルなものですが、終わりが来ることがわかる。これが実は重要なことです。自閉の子どもは知っておかなくてはならない。ショーはずっと続くわけじゃない。学校のホールも占領され続けるわけじゃない。給食を俳優に食べられてしまう訳じゃない。終わったら、日常に戻れる。
Ａ：ソーシャルストーリーは、ウェブサイトからダウンロードできるようにしています。
Ｔ：何か興奮するような大きな動きの後には、ストップして落ち着かせるための大きな深呼吸をいれます。ショーの流れの中で、このブレスポ

ーズが何度か繰り返されます。PMLD の子どもの場合には、遅れて反応する子もいます。考えるプロセスに時間がかかるのです。

Ｔ：この映像の中の雨雲には、霧吹きをいれています。その中に香りをいれてもいいですね。また、この映像では、鏡を見せながら、名前を織り込んだ歌を歌います。この手法は、多くの作品に取り入れています。あなたの名前を歌っているときは、誰もがあなたを見ていて、愛しているのだと伝えるのです。
参加者：名前の歌には、特別な節があるのですか？
Ｔ：決まったものはありません。毎回新曲です。
さて、『ブルー』という作品の中の「パンケーキ・ボブ」を見てみましょう。学校を巡演し、劇場でも上演する作品です。フェスティバルで予算を用意していただき、作品のキャラクターを学校の中に住まわせました。俳優たちが学校にレジデントすることで、子どもたちは作品の世界に慣れていきます。登場人物が 1 人 1 週間レジデントするのです。ある月曜日の朝、学校に小さな小屋が出現している。小屋の中にはベッドも調理用具もある、洗い場があって、井戸もある。ハーブのプランター、楽器があり、衣裳も来ている。子どもたちはこの人達が学校で寝泊まりしていると信じてしまいます。

自閉症の子どもたちの学校で、最初の日には、子どもたちは何もしませんでした。2 日目、子どもたちが関心を示し始めます。自閉症の子供は深刻になりがちで、子どもは「校長先生が学校を直すためにお金を必要としてるから、貧しい人を住まわせて、お金を取っているのじゃないか」と反応していました。3 日目には、シャイな子たちもやってきて、料理や洗い物を手伝い始める。俳優をコンピューター室や食堂にも連れていく等、素敵な関係性が生まれます。そして、金曜日、劇場に行く日、スクールバスで劇場に着くと、そこに自分たちの知っている俳優がいる。新しい人に挨拶などしたことのない子が挨拶をして、感動して泣いてしまう先生もいました。時間をかける、物語が次の日にも続くことで、リアルになる、夢じゃない、美しいリアリティです。
Ａ：俳優は「おはよう」の歌を歌います。歌の中に毎日違うアクティビティを織り込んでいく。セッションは自由ですが、パターンと構造は決められています。
Ｔ：映像は、4 日目。子どもたちは一緒にパンケーキを作るために、ボブに会いに来ました。（映像）

これが皆さんに可能かどうかはわかりませんが、できなくはないこと

だと思います。子どもが好きだったのは、普段しちゃいけないと言われていることをさせてもらえるからです。これは先生ではなく、俳優がやっている、やらせているからいいのです。混沌とした状態が楽しいのです。

参加者：終わらせ方は？

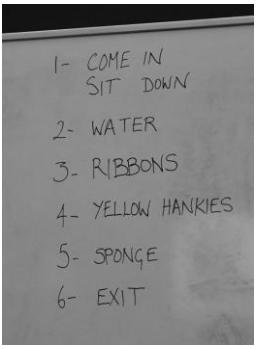
Ｔ：物語は、駅で展開します。ボブには駅に行くまでのことだと伝えさせます。学校から劇場、つまり駅に行き、ショーの終わりに電車が来て、さよならする。

Ａ：小屋は学校に残しました。また、『ブルー』では、色んなカバンを使うのですが、そのカバンを１個ずつ学校に残しておきました。楽器や遊びがはいっています。このときはフェスティバルが予算を用意しましたが、学校が自前で用意することもあります。

15. ペアで新たなクローズアップ／テーブルトップパフォーマンスを作る

第３日目

16. リハーサルは続く



17. 成果パフォーマンスを準備する

最終リハーサル

18. 子どもたちを観客として成果パフォーマンス

子どもは遊びの天才

19. ディスカッション

Ｔ：成果パフォーマンスを子どもたちに見せました。皆さんの意見をお伺いしたいです。
参加者：1 人よがりというか、やることに満足していてはいけないと思いました。
Ｔ：どんな活動をしているかによります。名声のため、お金のため、芸術的満足を求める。でも、コミュニケーションをとるのが困難な人たちと活動したいと願う劇団としてはそうはいきません。社会がそのような人々を尊重せず、マイノリティにしてしまう。オイリーカートはそこに橋をかけたいのです。でも、障がいのある人たちのために何かを多さなければならない。そのことが自分の満足にも、芸術の満足にもつながるのです。
参加者：コーディネートの立場で思ったのは、すべてのパフォーマンスにおいてですが、特に障がいを持った方、こちらが予想できない行動をする小さい子どもと一緒にショーをやるときに、本番ではなく、かなり前から多くのコミュニケーションが必要で、パフォーマンスをする側、人、場所、施設の情報量、どちらの情報量も一方的ではない双方間の交換が必要なんだと感じました。それがお互いのアイデアを深めるヒントになり得ると思いました。
Ａ：氷山の一角なのです。準備はとても大切で、見えないけれど不可欠で大切なのです。
Ｔ：例えば、今日の子どもたちと 1 週間前に会って遊んだり、先生方と話していたら、もっと興味深い作品になったかもしれません。例えば、

小さな自閉症の子どもたちが走り回っていましたが、それは施設としてOK なのか。オイリーカートとしてはもちろん OK ですが。ソーシャルストーリーやビデオがあれば、先生や子どもが事前に見ることができます。また、子どもが走り回っている動きを、作品の中に取り込むこともできます。例えば、トランポリンの作品では、子どもたちはトランポリンに勢いよく入ってきて、それで疲れる。そうすると、動きをゆったりとすることで美しいものになる。

今日は色んな子どもたちがいました。昼寝の時間だったからかもしれませんが、寝むそうな子もいました。医療ケアの必要な子もいました。意識しなくてはならないのは、彼らが反応するものを見いだすまで、オファーし続けることです。闇を作ったら、闇の中に何か明るい光を見せる。見えない子には、香りがいい要素かもしれない。だから、試し続けなければならないのです。

今日できたことで非常に良かったのは、多くの子どもたちが関わっていたことです。一人ひとりの子どものもとで、皆さんは優しく、エネルギッシュでした。

A：十分な時間がなかったにも関わらず、素晴らしいと思いました。ある意味、記録です。

参加者：初めての体験でした。自閉症の子どもに関わったのは初めてです。果たして興味を持ってくれるかどうか、でも、一緒に音を出して近づいてきてくれて楽しんでいたようです。

T：それが大事なのです。あなた自身がいいと思うことです。

参加者：演じている時、その子が何が好きなのか、事前の知識が大事だと実感しました。また、即興性が必要でした。

T：オイリーカートの構造は、極端な形態です。空間に 1 人か 2 人の子どもを招き入れて何かをやるには、その子どもの助けを必要とします。自由で、興味深いもの、オイリーカートはユニークな方法で、こうしてみない？と指示していきます。

オイリーカートは、冬の作品は、家族みんなで社会体験として観劇するように作っています。誰もが劇場に行けるのです。春と夏は、特定の子どもたちに向けて創造します。『ミラー・ミラー』では、自閉症児版、PMLD 版を作りました。ターゲットを明確にするのです。

来年の春は、PMLD、自閉、盲聾 3 つのバージョンを作ります。

参加者：叩くことが好きな子、水が好きな子がいて、これが好きならこれならどうかな？と色んなカードを持ってトライしていくコミュニケーションが楽しかったです。オイリーカートが少人数を対象にしている

理由が分かりました

T：1 対 1 を成り立たせるためには、ちゃんとオファーして選択しなければならない。100 人の観客がいたらできません。1 人 1 人と遊べませんね。大きい劇場での演技とは違うのです。第 4 の壁を越えなければならない。演じるより応えていくのです。幼い子どもには、第 4 の壁の考え方が理解できません、なぜ外側にいなきゃいけないのか。椅子に座っていなきゃいけないのか。面白そうだから、入って見たいんです。幼い子供と活動し始めた頃、なぜ俳優と子どもは離れていなきゃいけないのか、どうやって子どもの乱入を止めるのかを考えていましたが、子どもを作品の世界に招き入れたほうが楽しいことに思い至りました。

A：皆さんの活動に取り入れられることはありましたでしょうか？

参加者：子どもたちを前にすると多様な身体表現があり、それが出来ないといけない。かっこよさを求めていて、幼稚なことではなく、きちんと魅せていくことが大事だと。それをするために自分の身体を鍛えなければいけない

参加者：地元で自閉症の親子のミーティングを月に 1 回やっていたので、オイリーカートの紹介をしました。何か自分もできたらいいと思います。

参加者：役者になろうと思っていなかったけど楽しかったです。こういうことが演劇であれば自分のささやかな活動も演劇だったと気がつきました。世界的にそうかもしれませんが、デジタル機器がはやっているけれど、若いお母さんはおっぱいあげながら携帯を操作したりします。自分の立場からいうと生の声、動きで働きかける、感覚遊びが大事だと、伝えていきたいと思いました。

参加者：参加者を限定することへの勇気を、お客さんをフォーカスすることを恐れないことを、学びました。

参加者：オブザーバーとして本日初めて参加したのですが、感じたことは繊細なことをしていてコミュニケーションが生まれる前の感触を味わうこと、深く身体に届くようにプレーヤーが子どもたちに味わってもらうための役割をしていると思いました。プレーヤーになると何か伝えなきゃ、関わらなきゃって思いがち。深く届いたときにはコミュニケーションは生まれるのかな。やらなきゃが先行しすぎると余計な動きが生まれる、相手の様子をキチンとみることが大事。

参加者：私は小さなグループで練り上げてパフォーマンスを続けたいのですが、どれくらいの参加者が同じように思っているのか、仕事としてやりたいと望んでいるのか、特に、仙台では仕事にならないからです。本当に実現できるのか。時間をかけて子どもたちの前でやってみること

を本気でやる仲間を必要としています。学んだことはとても多い。時間をかければ、どんな子でも関係を築ける。だから今日のようなやり方ー子どもが 20 人いて 20 人で、わーっとやるのは、ふさわしくないと思いました。

第２部

オブザベーション

日本への思い

ティム・ウェブ

英国の児童演劇の劇団オイリーカートのデザイナーのアマンダ・ウェブ（芸名クレア・ド・ルーン）と芸術監督の私は、日本への訪問を終え、先頃、戻りました。日本のアーツカウンシルに働くとともに、その他多くの役割を担う、疲れを知らぬオーガナイザーのシアタープランニングネットワークの中山夏織女史にお招きをうけたからです。

アマンダと私は、遠い英国から、日本の古代の伝統、近代の発展、そして、とりわけ演劇の素晴らしいバラエティに対し、長きにわたり憧れを抱いてきました。しかし、10 月 5 日から 20 日までの旅は、私たちの期待を遥かに凌駕する体験となりました。

私たちの最初の訪問地は、東京。重い障がいを持つ大人のための居住型施設シャロームみなみ風で、オイリーカートの歴史と手法についてのセミナーを開催しました。その場所が、続く 3 日間のワークショップの拠点となりました。

私たちは約 20 名の俳優、教師、演出家、ソーシャルワーカーといった参加者―日々出入りがありましたが―とともに活動しました。想像力を羽ばたかせるために、シアターゲームと素材と空間の探求ではじめ、数々の多感覚と非常にクローズアップして、観客－施設の居住者たち―と出会うパフォーマンスを作り上げました。

毎日、素材の進化を試すために、彼らの居住エリアを訪問し、最終日の午後までに、約 30 分間のパフォーマンスを創造し、最終日の午後、私たちは総勢約 40 名の方々に向けて、2 度のパフォーマンスを提供しました。

アマンダと私は、素材を作り上げることにおいてとても想像的、それを演じる時にとても正確であるワークショップ参加者とともに素晴らしい時間を活動することができました。

参加者のうちの何人かが私たちに告げたのは、最初にオイリーカートについて耳にし、YouTube の作品の映像をみた際に、むしろ「奇妙」だと感じていたことです。しかし、いま、彼らは私たちの個人に特化し、

2 つのドレスリハーサル
撮影：ティム・ウェブ

インタラクティブなアプローチの価値を理解し、自分自身の活動にいかに活用しうるかを見いだしたようです。

私たちは東京から仙台へと移動。新幹線－弾丸列車で、東京から北へ 1 時間 45 分の都市です。そこで、いま一度、オイリーカートのバックグラウンドを紹介するセミナー、そして 2 日半のワークショップを開きました。今度は、すんぷちょが活動を行うコミュニティセンターでの開催で、私たちは東京と同様の、演劇人、コミュニティワーカー、教師といったグループとともに活動を展開しました。

私たちの仙台での観客は、様々な学習・感覚障がいをもつ 20 名の 5 歳児でした。私たちが強調したのは、クローズアップのパフォーマンスであり、一人ひとりの観客の求めるものに対しウルトラ級に反応するものです。

ワークショップでディバイジングで作られたパフォーマンスの素晴らしい要素の 1 つは、1 対 1 で向き合う際、多くを届けられる多大な資源を持ちうることです。そのお返しに、観客は作品に多大なる貢献をもたらすことができるのです。全てが上手くいった時、観客は作品の共同クリエーターに変わります。

アマンダと私は、仙台と東京の二つの都市で非常に興奮させる創造的プロセスと出会ったのです。それはこの旅のハイライトです。

京都では、少しばかり観光するチャンスもありました。京都では寺院と庭園の美しさに圧倒されるとともに、最大わずか 8 名しか入れない小劇場で舞踏のパフォーマンスを見る機会もありました（観客サイズとしては、非常にオイリーカートです）。

東京では、中山夏織女史が 2 回の歌舞伎公演を見るチャンスを与えてくれました。1 つは国立劇場で、もうひとつは、驚くほど伝統的な概観をもった劇場、歌舞伎座においてです。また、仙台では、東日本大震災の津波の被災地へ、すんぷちょの及川多香子女史が導いてくれました。

私たちが訪れたどこの場所でも、誰も親切で、私たちを助けてくれましたが、東京での「ノリ」こと飛田勘文氏、京都の木下出氏、仙台の及川多香子女史、そして全ての場所で、中山夏織女史に感謝したいと思います。

私たちはこの旅を愛しました。そして、心の底からたまらなく日本を恋しく思っているのです。

2016 年 11 月 16 日

（てぃむ・うえぶ／演出家・
劇団オイリーカート芸術監督）

オイリーカートの魔法

多田　美紀

「インクルーシブ」という言葉を、最近耳にするようになってきている。だが、「インクルーシブ・シアター」と聞いたときに、私はこれまで「演劇をすべての人に」ということをこれまで深く考えではいなかったことに気づいた。

オイリーカートについて大した予備知識もなく私がイメージする演劇とは違うだろうなという、漠然とした考えだけで参加し、そのためか実践的なワークショップを受けながら、そのあいだ、私はずっと戸惑い続けていた。

初日、私のチームには、「音」という課題ともに、いくつかの民族楽器が与えられ、何かをしなくてはならなかった。気づけば、他のチームは布やテープを使ったり、なんだかきらびやかになっている。

私たちは椅子でエリアを囲の中を回るだけでそれぞれの楽器に統一性はなく、特別なイベントがあるわけでもなくこれでいいのかと戸惑っていた。

最初に観客といて訪れた姉弟は、私たちの意気込みにおびえてしまい、何人目かの観客に一緒に音を鳴らして歩くというシンプルなことを喜んでもらうことができたとはいえ、参加者により反応がばらばらだった。

その後、最終日のパフォーマンスに向け、チームごとにテーマをあたえられた。「ブラシ」のチームでは内容を決め、絞り込み、掛け声のような音楽と３種類の小さいパフォーマンスを決めた。

ブラシチームでの前日の試作パフォーマンスで、私には対象者の方々が喜んでいるのかよくわからず、子どもだましのことをやっているのではないだろうか？　本当に喜んでくれるのだろうか？　そんな疑問が湧いていた。

その夜、自宅に戻り、改めてネットでオイリーカートのパフォーマンスを見て、その美しさと芸術性の高さに驚いた。ティムたちは私たちを相手に、これを作ろうとしているのか？

テープや毛糸やその辺にあるものを使って体に張りつけている私たちに、こんなことができるのか？　とうてい無理なのではないだろうか？

最終日に、結局、私たちが行ったことは、音楽を鳴らしながら登場し、簡単なパフォーマンスをして退場する。それだけであった。それだけのことなのに、ティムはぎりぎりまで登場のタイミングや、音楽のタイミング、流れを、何度もチェックし、パフォーマンス内容も、ひとつずつ精査していき、少しでもいいもの美しいものにしようという、その追及の姿勢にただただ驚いてしまった。

最終のパフォーマンスが終わった時に、「楽しかったですね！」と同じグループの方が紅潮して言っているのを聞いても、やっぱり私は戸惑っていた。なぜ私はあんなにも戸惑っていたのだろうか。

後になりいくつかのことに気づいた。
試作中に体験者の代わりを務めたが、目の前のパフォーマンスではなく、他を見ていても心は動き、相手の意図とは違うことでも楽しむことができる。
また知人のお子さんも参加してくれたが、普段なら面白くないとすぐに歩き回ってどこかへ行ってしまう子が 2 回とも参加していた。

今思えば私のパフォーマンス中に何度か集中をした仕草や、一瞬の笑顔を見ることができていたにも関わらず、私はいつものような「わかりやすい反応」を正解として求めていたのだ。

ティムたちに言われたことの中に次のようなことがある。

- 何もない瞬間を大切にする。
- 点に立つ。
- 子ども扱いをせず対等である。彼らをリスペクトする。
- 情報が多すぎない方がいい時もある。（同時にイベントを多発させない）

つまり「シンプル」に、彼らは参加者に寄り添っている。

体験するにつれ、これまでアプライドドラマにかかわり、演劇で人に何を与え共有し、どのように社会とかかわるかと考えていた私にとり演劇とはなんだろうかと改めて考えさせられた。
オイリーカートの演劇は「与える」というよりも、相手の中に最初から存在する素晴らしさを引き出し解放していくことなのかもしれない。

最後に感想を伝えるなかで泣き出した方に、アマンダは「この取り組みを通して俳優としての自分の意味を見つめなおす人がたくさんいる」そして「パフォーマンス中に魔法がかかる瞬間を何度も見た」ともいった。

きっと私たちはこの間にインクルーシブ・シアターというその言葉のまま、すべての人とともに演劇を分かち合うオイリーカートのティムとアマンダへの魔法にかかったに違いないと私はそう感じている。

（ただみき／日本工学院専門学校教員
アプライド・ストーリー・ラボ『ASLa』）

「人間愛」～オイリーカートの魔法～

落合　咲野香

今回のワークショップに参加したきっかけは、以前、オイリーカートのスイミングプールでのパフォーマンス映像を見て、衝撃を受けたことであった。障がいを持つ子どもたちが、俳優と共に楽しそうに、しかも水の中で！　オイリーカートの魔法にかかっている姿は、私の持っていた演劇に対する概念に、カウンターパンチを食らわせた。観客が 1 度に 2 人だけというプログラムもあり、日本の演劇シーンの感覚からだと、何もかもがとても信じられないことばかりであった。もちろん、英国と日本の演劇を巡る状況の違いは多大にあるが、それだけが理由ではない。私は、彼らの演劇に対する理念と姿勢が根本的に違うのではと感じたのである。それは一体何なのかを探り、学ぶことが私の一番の目的であった。

3 日間のワークショップの目標は、演出家のティムとデザイナーのアマンダのフィードバックを受けながら、30 分ほどのパフォーマンスを創作し、最終日に上演を行うことであった。創作するパフォーマンスの観客となったのは障がい者支援施設「シャロームみなみ風」に入所されている方々や、障がいをもつお子さんをお持ちのご家族等。障がいの程度や特徴も様々である。どのようにオイリーカートの魔法は作られるのか、パフォーマンスを創作する過程で身を以て感じることができた内容を振り返ってみたい。

パフォーマンス創作は、「紙」と「ブラシ」という 2 つの物をキャラクター化し、それぞれの特徴を生かして音を生み出したり、素材を味わい楽しむ仕掛けを、皆で考案することから始まった。日常にある身近なものを題材として使うことにも意味がある。子どもたちが興味を持ちやすいということと同時に、日常に戻った時にそのものと出会うとき、劇場で得た体験とつながり、新たな感覚やイマジネーションをかきたてることができるからである。

私はブラシ担当になり、9 人の「ブラシ」チームで 3～4 種類のブラシを使うパフォーマンスを考案することになった。オイリーカートでは、「俳優が何かをやって見せて、それを子どもがただ見ている」というこ

とはない。観客も触れて体感し、共に楽しみ経験することが重要なのである。どうしたら「ブラシ」を題材に、観客が楽しめるユニークで魅力的なパフォーマンスができるか、大人の凝り固まった見方に喝をいれて、想像力をほぐす。「歯ブラシ、化粧ブラシ、ほうきもブラシか…掃く、塗る、磨く…ふわふわ、とげとげもあるなぁ…シュッシュ！ゴシゴシ！」まるで幼児期に戻ったかのように、ブラシと戯れて、可能性を探る。毛糸で作ったブラシで触感を楽しむ方法、葉っぱを「掃く」という行為にフォーカスした方法など様々なアイデアが、皆から上がる。私はローズマリーの葉を束ねてブラシに見立て、その香りや触感を楽しむ方法を思いつき、使うことにした。

そして、キャラクターを表現するためのコスチュームも重要で、アマンダの助言を取り入れながら、皆で試行錯誤して創作をした。何パターンかのうち、「観客が触れてたのしめるうえに、見た目もユニークで、量産できる！」と、荷造りひもで作ったポンポンをブラシに見立て、頭や体につけるアイデアに行きついた。そして、施設職員の方から「彼らは視覚優位なので、カラフルな色が効果的」とのアドバイスを受け、最終日には、皆がハデハデな「ブラシマン」と変身した。また、ブラシで奏でる音は「シャッシャ」と大きい音が出ず、私は簡単な「ブラシのテーマ」を作曲。皆に採用していただき、「ブラシ、ブラシ、ブ～ラシ！」と合唱する要素も加わった。

最終的に、「紙の女王」が率いる上品で綺麗な「紙」チームと、「ブラシ大王」率いる、派手でにぎやかな「ブラシ」チームのパフォーマンス対決の体をとり、観客に順番にパフォーマンスを各チーム 2 回ずつ、計 4 回行った。最後は、お互いを讃え合い、音楽と歌で愉快に幕を閉じるという構成になった。たった 3 日間、ひとつひとつの作業をティムとアマンダの導きで組み立てていったら、見事に「オイリーカーティー」な作品になっていた。

そして、本番。「ブラシっ!　ブラシっ!」の賑やかな掛け声と、揺れるポンポンに笑顔がこぼれ、「紙の女王」にうっとりする子どもたち。そしてメインの 1 対 1 でのパフォーマンス。私の場合、ローズマリーの葉ブラシをアロマウォーターに浸し、それで水しぶきを作り、そのままひんやりしたブラシを、子供の腕や顔に沿わせてみたり、匂いを共に嗅いだり、机の上を「ブラシ～ブラシ～」と歌いながら掃除するパフォーマ

ンスを行った。互いに目をみて、反応を確かめながら、ともにローズマリーの素敵な香りと質感、見た目を楽しむ 2 分間。初めはおっかなびっくりだった子も、ローズマリーを手に取って、さらに葉っぱを口に入れてみたり！「いい匂い～」と喜ぶ子や、はっきりとした反応は示さなくとも、じっと興味をひかれているのが全身から感じられる子がいたり。もし、これを多数の子どもに向けて、一方的にパフォーマンスをし、ただブラシが転がっていても、こんな反応は帰ってこないだろうと強く感じた。なぜなら、「ブラシ」を媒体に、1 対 1 の子どもとの密な交流が生み出す、目には見えないエネルギーが子供たちの心を一番に揺り動かしていると強く感じたからである。今回は観客の数が多く、1 対 2 にならざるを得ない状況もあったが、子どもと向き合うときの質をいかに高められるかがとても重要なのだと思う。そして、パフォーマンスの締めくくり「ブラシのテーマ」の合唱に自然と手拍子まで湧いてくる。「もう終わっちゃうの？」と同時に、「とても楽しかった！」という空気がひしひしと伝わってきて、後ろ髪引かれる思いで拍手の中、パフォーマンスを終えた。

その後のフィードバックで、施設の方から、普段は、旅行でさえも「つまらない、帰りたい」というような人も、今日はとても楽しんでいたという事を聞き、なんという魔法だろうとつくづく感じた。その人は、私がパフォーマンスをした一人でもあり、気恥ずかしそうにしながらも、本当にうれしそうな笑顔を見せてくれたことが印象的だった。

参加者の皆からも、施設の方からも「そういう魔法を今日はたくさん見た。演劇の力を改めて感じた」という声がたくさん上がった。実際、終演後の楽屋に興奮冷めやらぬ拍手と歓声が聞こえてきて、こんなにも喜んでもらえるとはにわかに信じがたいほどだった。まさに、オイリーカートの魔法を実感した瞬間だった。

ワークショップに参加して痛感したのは、オイリーカートの、観客を全体ではなく、一人ひとりに最大限の愛と敬意をもって対峙するその姿勢の素晴らしさである。パフォーマーと観客との関係性が、発信する→受け取るではなく、共に感覚体験をうみだし共有するという双方向性に基づいているのである。そして「すべての子どもたちに演劇を」という

オイリーカートの理念があるが、その「すべて」の意味合いの繊細さと深さが究極的なのである。服で例えるなら、マスを想像した「既製服」を生産して売るのではなく、観客一人一人にぴったりの「オートクチュール」の服を仕立てるような感覚なのである。特に、障がいをもつ子どもたちに対しての親密なパフォーマンスは、それを顕著に表している。決して見下すのでもなく、かといって健常者の子供と同様に扱うのではない、ありのままの彼らを受け入れたうえで、彼らに最適な表現を選択するのである。特に、障がいのある子どもたちにとって、劇場に行くことは簡単ではなく、一生のうちに芸術に触れられる機会は限られている。彼らに豊かで特別な感覚体験をあたえたい、懐が広く深い人間愛がそこにはある。そして、彼らは演劇にしかできない魔法の力がどのようにしたら効力を最大限に発揮するかを、本当に知っている。それを実現させるためには、1 度に観客が 2 人という選択も辞さない。徹底的に観客の立場に立ち、その体験の質にこだわる。私が最初に感じた「演劇に対する理念と姿勢が違うのではないか」という問いは、「演劇」に対してというより「人間」に対する姿勢の違いなのだと思い知らされた。ティムとアマンダと一緒に3日間を過ごし、その人間性を通じて深く納得した。

今回、参加して得た経験は本当に貴重なものとなった。自分は果たしてどこまで観客の立場に立っているか、愛とユニークさを失わずに様々な障がいに立ち向かうことができるか、社会にコミットできるのか、アーティストとして様々なことを考えさせられる 3 日間であった。また、演劇の持つ力を改めて発見し、希望を感じることができた。

改めて、ティムとアマンダ、志高い参加者の皆様、パフォーマンスに参加してくださったシャロームみなみ風の皆様とご家族様、中山様、携わった皆様に改めて感謝とお礼を、この場でさせていただきます。ありがとうございました。

（おちあいさやか／俳優）

教育でも、福祉でもない楽しさ

金親　浩一

自分は、重度重複障がい（身体障がいと知的障がいを併せ持つ）の成人の方の通所施設で働いています。オイリーカートのワークショップに参加して、まず思ったのは、「自分の施設の利用者さんにも体験してもらいたい」、「日々のプログラムのなかに生かしていきたい」という事でした。

具体的には、『バウンス』というプログラムで 、ただトランポリンを使うだけでなく、周りに円形のスクリーンを用意して、その中に、ボールが跳ねる映像、子ども本人の生映像他 などを用いて、自分の動きを視覚的により、楽しんでもらうとしている事、「プールの中でのプログラム」の中で、その中では、音楽、水、照明、プールの中で水の感触を感じるだけでも、十分楽しめるのですが、そこにも、「音楽」「照明」「衣装」などを使い楽しませようとしている事、「パンケーキ・ボブ」というプログラム！！　（これが一番 大好きなのですが）　。

まず、演奏で始まり、言葉だけでなく 音楽を通じて、これから パンケーキ作りが始まるんだ！！という事が、本人たちにもより伝わります。実際の行程でも、振る粉をわざと手の上にかけて、感触を感じた上で、自分の手で混ぜたりする、目の前にフライパンを持ってきて焼く、ジャムやハチミツを目の前に持って来て選んでもらっているのですが、この行程のほとんどに、それに合わせた音楽がある事、それも何気ない曲だけど、演奏も曲の質も高い。 施設のプログラムの事を考えると、音楽のプログラムの時には音楽、料理のプログラムの時には、ただ料理をする、当たり前かもしれないけど、オイリーカートの音楽（質の高い）を使う事で、まず、ご本人たちが 楽しくなり、色々なものを受け入れやすくなる！！！！！！！

ホントに凄いと思いました！！！！！！！

最後に、オイリーカートは 教育的な視点、福祉的な視点を入れていないという事、ただどうしたら 小さいお子さんや 障がいも持った方たちが、舞台を楽しめるか ただただそれを追求している事、それがとても素晴らしいなあ〜と思い、日本でも、もっともっと広まっていけばいいし、自分も関わっていきたいと思いました。 この出会いに、感謝したいです。ありがとうございました。

（かなおやこういち／新宿区立あゆみの家職員）

ホスピタルシアタープロジェクトの挑戦

黒田　志保

10 月 8－10 日の 3 連休。シアタープランニングネットワーク主催のオイリーカートワークショップに参加した。9 歳の我が息子と共に学ばせてもらいました。受け入れて下さった関係者の皆様本当に有難うございました。

ホスピタルシアタープロジェクト—最初からこの名前ではなかった—に関わらせて頂いてかれこれ 7 年目。2010 年から今回のワークショップに至るまでの道のりと、この 10 月、実際に、オイリーカートの芸術・美術監督のお二人に導かれながらパフォーマンスを行って得た体験を基に、振り返りご報告します。

初めは 2010 年。アメリカのクラウン、モシェ・コーエン氏を招聘し、病院や障がい者施設、小学校の学童保育を巡ったのが始まりだった。国境無き道化師団北米代表で実演家のモシェ氏。難病や末期病棟の病室だけではなく、あらゆる紛争地帯の難民キャンプで心に深い傷を負った人々を笑いで勇気づけてきた、彼のクラウンとしての技能は非常に高かった。フランスの舞台芸術家フィリップ・ゴーリエ氏が私たちの共通の師匠だと分かり「彼は素晴らしいが言葉がワルくて厳しすぎるよな！」と笑い合った。モシェ氏の技術や経験は一朝一夕に真似事で身に着けられるものではなく、大きな実力差に尊敬と羨望を感じ唖然としたことを覚えている。そのことを率直に伝えると、「ショーのクラウンのように爆笑させる必要はないんだ。一人一人をアップリフティング（気持ちを軽く）出来れば、ほんの少し笑顔がこぼれれば、それでいいんだ」と言う。今回のワークショップで学び、実際に重度の障がいを持った方々を目の前にパフォーマンスをして得た実感から思い出されたのは、このモシェ氏の言葉だった。

今回のオイリーカートのワークショップでシャロームみなみ風の利用者さんたちの前でワークショップの成果である作品を実演し、見ている利用者さん（重度の心身知的障がいの方が多かった）たちの表情が笑顔に変わり、保護者や施設スタッフさん達に驚きと喜びの共感の輪が広

がったのは、まさにアップリフティングを実践したからなのではないだろうか？　別に、特別に訓練が必要なパフォーマンスをしたわけではない。ショー全体の構成にはティム氏とクレア氏の高い芸術性でまとめ上げられていたけれど。

体験する利用者さん一人一人の目の前、まさに 20—30 センチの距離で行われたことを列記すると、「シャボン玉」が飛び、「ローズマリーの葉っぱから滴り落ちる水滴の香りと冷たさ」に喜び、「ペットボトルに入れたビーズの立てる波の様な音」、「LED ライトの光」等々を、やる側と見る側が共に楽しんだことだ。一つ一つのコンテンツはそれだけなのだが…。さすが英国人のお二人、全体の構成を『夏の夜の夢』の世界観とステキな衣装でまとめ上げて下さった。ブラシの国の王様（オーベロン）とペーパー（折り紙）の国の女王様(タイテーニア)に引き連れられた、それぞれの家来たちが、観ている利用者さんたち一人一人に対して、各々の行うパフォーマンスでどちらがより喜ばせられるかを対決するという構成（恐縮なことに我が息子をパック役にして下さった…感謝感謝の親バカです）。演者たちの登退場にも一工夫がされていた。先ず、家来たちが入場し、それぞれの女王様と王様を招き入れる。自分たちこそが観ている人を喜ばせるんだ！ と気合を入れた賑やかな登場だ。偶然にも、女王様はバレエの動き、王様の私は日本舞踊の動きで、和洋の対比も出た。ペーパー国の衣裳は赤紫と、青紫二色の折り紙をそのまま身体に張りつけたり、冠にした。そのスーパースタイリッシュなこと！ 真四角のままの折り紙が、そのままオシャレな衣装になるなんて…。クレア氏のセンスの良さに感動でした。それからパフォーマンスを 2 分づつ、交互に二度行う。双方全てが終わったところで、お互いの健闘をたたえ合って挨拶する。そして、厳かに退場して後に、カーテンコール。ブラシの国が「ブラシ、シュッシュッ、ブラシ、シュッシュッ、ブラシ、シュッシュッ！」と掛け声をかけ、歌いながらながら登退場—夏織氏は『タイムボカン』のビックリドッキリメカの登場が強烈に連想されたらしい—という言葉以外は、完全にノンバーバル（非言語）で行われた。この構成と非言語演技が作り出す世界観や、見て下さる方々の喜びようが私には衝撃的に大きな驚きでした。

作品を作り上げるワークショップの中で実際に体験し、印象的だったエクササイズを列記する。ステンレス製の調理用ボールに顔を埋めて、好きな言葉を叫ぶ（参加者各々の思い思いの言葉が面白かった）。目を

つぶって床に座っている人々に、様々な音を聞かせて怖がらせる、「音だけのお化け屋敷ごっこ」は、意外にリアルで怖かった。簡易のテントや折り紙、傘、ロープ、楽器などの日常生活で使う道具を、本来の目的以外で使って遊ぶ遊び方を探すもの。例えば、簡易テントは芋虫お化けになって動き廻り、傘はコマや縫い針、パラシュートになった。先ずは、自分自身が本気でそれを楽しまなければ！　自分の中に眠る子ども心、イタズラ心、がドンドン呼び覚まされ、楽しみを発見、創造していく感性が敏感になってきた。

とはいえ、実際に個々の利用者さんの至近距離でパフォーマンスをする場面になると、正直、「いくら知的に障がいが有る方々とはいえ、こんな事を楽しんでくれるのだろうか？」疑り深い私は、パフォーマンスがあまりに幼稚（他に言葉が思い浮かばず失礼…）に思えた。「この単純極まりないパフォーマンスを、演者自ら心底楽しんでいなかれば見て下さる方も楽しめない。本気で楽しめ！一緒に遊べ！」と、思い直し心にスイッチを入れた。ティム＆クレア氏の経験と高い芸術性を、すがるような思いで信じ切ってパフォーマンスを行った。自分の眼前 20—30センチ先で、奇跡と魔法の瞬間はすぐに表れた。見ている方の眼がパッと輝き、首を前後に振り、笑いたくてヨダレを垂らしながら、動き難い身体をよじらせて喜ぶのだ。

モシェ氏の言葉「アップリフティング」「が私の体の中でよみがえった。と同時に共通の師匠フィリップ・ゴーリエ氏の言葉「瀬戸物屋の中で暴れる像のようなあらく強い気持ちで演技してはいけない。これでいいのか？　自分のやることは楽しんでもらえるのだろうか!?と慎重におそるおそる、相手の呼吸を感じながら大胆にやれ」、それらの重要性を改めて感じた。

ホスピタルシアタープロジェクトの作品作りの基本はディバイジングである。参加者が長い時間をかけ、アーだ、コーだと話し合いながら、いったい今日の稽古時間は？ 創作の成果は？ なんだったのだろうか？と、一見「？」なオシャベリ時間を繰り返し重ねながら作り上げて行く。その積み重ねが何より重要で、作品の背骨と役作りが自然に出来上がっていく。故に、参加メンバー全員が誰の役とコンバートしても成り立つようになる秘訣なのだが、創作中は、非常にツライ…。

2011 年の初年度はストーリーテリングやコーポリアルマイム、インプロビゼーション等の手法を学び合い体験しながら創作を続けた。2011 年の作品『リトルクラウンのフシギ旅』 2012 年の『ペランとパローレの冒険』 、2014 年『キノコの国の魔法使い』、それぞれの創作の現場では、様々なアイディアが浮かんでは消え、浮かんでは消えを繰り返した…。

私見だが、アイディアが消えてゆく小さくない理由の一つは、全体のストーリーとしてまとめ難いと言うものではなかっただろうか？　もちろん、近年の舞台芸術が、必ずしもストーリーありきではない創作が多くなっていることは、皆が知っている。だが、私も含め、ストーリー（あらすじ）ありきの芝居芸術の世界で生きてきた者にとって、ストーリーが無いことの想像は、非常に難しく、不安なものであった。いま思えば、ストーリー性に「お守り」のようにすがっていたのだろうか？

2015 年 3 月に招聘されたレイチェル・スミス氏のコミュニティー・ダンス・ワークショップでも、ノンバーバルの創作の楽しさは存分に体験し、理解していたつもりだった。2015 年初夏、中山夏織氏が英国から持ち帰った『オイリーカートの DVD』を鑑賞しても、そのあまりの美しさとクオリティ、理念、社会環境の高さ、日英の差の大きさに圧倒され…、憧れしか感じられなかった。どこか別世界の物を観てしまったようで…。頭の中では常に巡演作品に仕上げるためには、どう起承転結、見せるためのストーリー展開するのか？を考えて続けていたのだろう。実際にお合いしたオイリーカートのお二人は、その「お守り—私の想像性をがんじがらめに縛り付けていた鎖—」を、いとも簡単に打ち砕いて下さった。

2015 年 3 月 5—6 日、こども教育宝仙大学オープンデーで行われ、私が体験したパフォーマンス『妖精の国』は、大学の施設の中で共に鑑賞したのは大人—しかもこの世界に興味関心のある方々—が多かった。メールや FB で流れてくる参加メンバーたちの創作過程の苦心を垣間見ていた私は、「よくぞここまで新しい想像をまとめ上げ、楽しい体験をさせてくれた」と感じていた。が、実際の障がい者施設や、病院で行われている様子を拝見出来ず、このインパクトを体感し得ずにいた。さらに、これを演じているのは、一人一人が豊富な演劇経験と芸術性を持っている俳優たち。演劇経験と高い芸術性はとても大切なことだと思う。一方で、それらを身に着けていなければ施設利用者を楽しませることが出来ないのか、そんな素朴な疑問が浮かんできた。

今回のオイリーカートワークショップの参加者は、俳優たちばかりではなかった。福祉現場のスタッフさんもいた。観る相手への気配り、障がいへの理解、彼らと一緒に遊ぼう、楽しもうという心さえあれば、誰にでもパフォーマンスが行える。その可能性も示すことが出来たのは何よりも大きかった。人間誰でも、障がいの有無は関係なく、美しく楽しい芸術は必要なのだ。そのためには、鑑賞の機会もそうだが、演じることへのハードルを下げる必要がある。重度の障がいを持っていても、鑑賞する楽しみ、自ら参加する楽しみ、自ら創造し、演じる楽しみは、日常生活にありふれていて良い。その必要性と可能性は前述、コミュニティー・ダンスのレイチェル・スミス氏も十分に示してくれた。季節の行事毎に病院や、高齢者、障がい者施設のスタッフが演じ、患者・利用者さんがその鑑賞者になるばかりではない。それと同時に、我々舞台芸術の実演家たちが行う際には、そこに別次元の美しさや楽しさ、鑑賞者たちを夢見心地にするクオリティが求められると、改めて大きな可能性を感じさせられた。

中山夏織氏とシアタープランニングネットワークによる、ホスピタルシアタープロジェクトの想像と実践の挑戦は、まだまだ続いていく。この挑戦が変えるのは、日本と演劇界の創作やパフォーマンスや我々演劇人たちの社会に対峙する姿勢だけではない。障がい者も健常者も混ざり合って、イキイキと生きる社会作り。それは、誰にでも芸術や演劇の持つ美しさ楽しさを体験することは必要で、それを社会が必要と認め、支援しあう、これが必要だと認め合う社会作りなのではないだろうか？
まだまだ共に夢を見て、共に夢を追い続けたい。

（くろだしほ／俳優・ワークショップリーダー）

インクルーシブされる側

谷口　直子

英国で 35 年にわたり、幼児から様々な障がいをもつ子どもたちを含む、すべての子どもたちに優しく寄り添い、美しくて、ユニークな演劇体験を提供してきた劇団、オイリーカート。今回、芸術監督のティムと、美術監督のアマンダが来日する。彼らの公式 HP や、劇団の活動にまつわる論文を読みながら、どんどん興味を深めて行く中で、正直一番心惹かれたのはこのワークショップの謳い文句でした。「知的障がいをもつ子どもたちにとっての鑑賞の意義を探るとともに、いわゆる演劇の演技とも、演劇教育に求められる資質とも少し異なる、子どもたちの反応をひきだし、受けいれ、応じていくパフォーマーの位置と姿勢、そしてスキルについても学びます」。

日頃、子どもたちのために小さな作品を上演している私にとって、いつも気になっていること。いわゆる演劇の演技とは、少し違う感覚が必要であること。子どもたちの反応をいかに引き出すか、そのコミュニケーションの姿勢。障がいのある子どもたちのためだけに上演をした経験はないけど、彼らの活動を見ているとまさに今の自分に必要なことがちりばめられていると確信したので、夫や義両親、そして、なにより幼い息子に頼み込んで、少し無理をして、北九州から参加させてもらいました。

１日目のセミナーは、彼らの上演映像や写真を見つつ、どのような点を重視して活動を続けてきたか、観客とどのように関わっているのかなどのお話を聞かせて頂いた。

ひとつの作品について、障がいのない子供たちに向けた上演バージョン、PMLD－重度重複障がい―の子どもたちに向けたバージョン、自閉症スペクトラムの子どもたちに向けたバージョンと、3 パターンを制作しており、そのそれぞれの上演パターンは、それぞれの子どもたちの特性に合わせたものになっていた。さらに言うと、子どもたちそれぞれの個人的な特性にまでも合わせて、その対応を変える、オーダーメイドの演劇、と言っていいほど丁寧な作りをしていた。

上演の前に、子どもと一緒に観劇する親御さんや先生方とコミュニケーションをとり、子どもたちがその作品世界に快適に存在し、その体験

を存分に味わうための準備をする。その段階から、既に上演が始まっている。とても繊細で緻密な準備と、あらゆる事に対処するための余白。だけど、無駄がない印象だった。そのスマートさは、特別なトレーニングの結果というよりは、いかに演劇で緻密なコミュニケーションをするかという実践の蓄積のように見えた。

障がいを持つ子どもの場合、お芝居の始まりの部分をエンディングの段階で覚えていられなかったり、興味を失ってしまっていたりすることがある。そんな場合でも、その子どもたちなりにその世界を味わえる、体験できる工夫が必要だ、と。そのために彼らの工夫は、よりその世界観にクローズアップして、近寄って、「理解する」のではなく「体感する」ことができるようにしているように感じた。手触り、音、匂い…。一人一人がどのような体験をし、何を感じるかに特に焦点を置いて、作品を制作していた。

セミナーの翌日からは3日間のワークショップ。場所は、セミナーも含めて、新宿区のとある施設の一室を借りて開催されていた。3日間を通して、基本的なシアターゲームやグループワークを通して、何度か小さな作品制作を行い、その都度お客様を招いて見て頂いたり、フィードバックしたり。最終日には、入居している利用者さんや、外部の子どもたちをお招きし、少しまとまったパフォーマンスを見せる、というものだった。

日々、新たな発見があったり感動したりしたのだが、3日間を通しての感想は…目からウロコ、とは違う、ただ、今まで自分がなんとなく指向していたぼんやりした海流が一気にぐっと近づいて本流に巻き込まれたような。ああ、こっちで間違いなかった！という確信に頬をなでられるような感覚だった。

今回私たちが作った短いパフォーマンス、特に「テーブルトップパフォーマンス」は、観客の前にテーブルを置いて、一人か二人の観客とそのケアをする人ー親御さんか施設の担当の方ーに向かって、なにか特定のストーリーを展開するのではなくて、自分が持っている道具や音などを使って観客に感覚的な働きかけをしていく、というものだった。観客によっては準備しておいたものが全く通用せず、別のアプローチを試すことになったり、場合によっては、全然とっかかりがなくて不完全燃焼

に終わったりする場面もあったのだが、基本的には、ごく少数の観客と、深くコミュニケーションを交わすような仕組みになっていた。
それは、これまで自分が演劇を続けてきたことの根源的な理由を突きつけられるような瞬間の連続だった。

「私、こういうのを持ってきたんですが、どうでしょう？」に対して「うーん。おもしろいね！」とか、「全然おもしろくない！」とか、無言で何も言わないけど、じっと見ているとか。中にはもう嬉しくて叫び出しちゃう人もいれば、イライラしてそっぽを向いてしまったり。しかし、そこには必ずリアクションがあって、そして私たちはそれを決して無視できない。どうにか拾って、なんとかしようとする。

そうこうしているうちに、演者も気づいているかいないかわからないけど、とても美しい瞬間が訪れたりする。訪れないこともあるけど。その余白もまたワンダフルだったりする。それもこれも全部ひっくるめて、ああ、インクルーシブって、私たちが包むんじゃなくて、私たち、包まれる側だったのだ。と静かに胸打たれたのでした。

子どものために演劇を作りたいと思ったとき、そうだった、とふと思い出した。観客であるはずの子どもたち、ワークショップの参加者であるはずの子どもたちから、私たちはいつもたくさんのことを教えてもらっていたこと。彼らの反応はいつもヴィヴィッドで、新鮮で、優しくて、手厳しい。人間であることそのものだったから、迂闊な私はいつも脇腹をつつかれて、油断するな！　だけど、一番自分が楽しめ！と彼らに言われてここまで来た気がします。

今回目の前にした観客は、これまで相手にしたどの子どもたちよりも鋭敏な感覚を持ち、さらに正直で、さらに鋭く、手強い、そして誰よりも優しい観客だった気がします。そして、例の如く、また悪戦苦闘する私を包んでくれたのでした。

歳を重ねるごとに涙もろくなって、今回も良い歳して、大勢の人の前で涙が止まらなくなってしまいました。そんな私を、美術監督のアマン

ダは優しく抱きしめてくれて、別室へ連行し、優しく諭してくれました。「なぜ私たちが、子どもたちや障がいを持つ人のために演劇を作るか。それは、それが一番面白いからよ！」

私も同じ確信を持っています。そう、一番面白いと思っているからやってるんだよ！

企画してくださったシアタープランニングネットワークの皆様、シャロームみなみ風のみなさま、ティム、アマンダ、そして多くの出逢いに。心から感謝します。

この経験を活かせるかどうか。早速、保育園で子どもたちと演劇あそびの時間を持たせてもらうことになりました。楽しい時間を過ごせたらと思っています。

（たにぐちなおこ／俳優・501FURNITURE）

＊　501FURNITURE のブログより、許可を得て転載。

丁寧で配慮ある関わり

佐藤　一恵

演劇をあらゆる子どもに、というワークショップの内容に魅かれて参加させていただきました。年齢や、持つ障がい如何に関わらず、すべての子どもが楽しめるとはどのようなことか…。

参加し、率直に思ったことは自分の日ごろのコミュニケーションがいかに自分本位であったかということ。しかも、私は障がい者施設で勤務していたことがあるにもかかわらず・・・ということです。

ワークショップでは、参加者が、実際、支援学校に出向いて、小さな舞台を提供させていただきました。私はスポンジの精として登場しましたが、そのなかで「ブレスポーズ」という、深呼吸の時間を取り入れることを、オイリーカートのティムから教わりました。矢継ぎ早に次々と提供するのではなく、目の前の出来事を子どもたちが自分に落とし込んでいくために必要な時間です。この時間を入れていくことで、子どもたちは安心でき、また提供する側もじっくり子どもの様子をみながら進めていくことができます。

ひとりひとりに個別性を持った楽しみの提供とは、必然、丁寧さとこまやかな観察、気づきが大切なことに気づかされます。丁寧で配慮ある関わりは、洗練された印象を作ります。

コミュニケーションで大切なことは、伝えたことがどのように相手に伝わったかを知ること。とかく時間に追われながら生きている私たちは、相手への配慮をないがしろにしがちですが、自分も心から楽しめる時間を持つことで、相手のことを考えるゆとりができます。ティムが話してくれた「自分が心の底から楽しいと自信を持つことが、子どもが楽しむ一歩」。この言葉は、あらゆる人たちとコミュニケーションを図るうえで、ベースになる大切なことだと思いました。

（さとうかずえ／看護師）

後記―大きなムーブメントへ

オイリーカートのお二人の来仙は、多くの学びをもたらしてくれました。あらゆる障害の子どもたちに向けた感覚演劇、ソーシャルストーリーを含む、上演のための準備、少人数を対象とした上演をささえる公的・民間助成、それらすべては子どもたち一人一人を尊重する、誰もが芸術を楽しむことから疎外しない姿勢から生まれたものです。

とても胸を打たれました。

同時に、この学びを仙台で形に残していくには？―模索と楽しみの狭間で、ワークショップの余韻に浸っています。

オイリーカートは今年で 35 周年！　アートワークショップすんぷちょは、法人化して 2 年です。私たちも時間をかけて、1 人 1 人の子どもたちに向き合いながら、暖かい芸術体験を生み出していきたいと思います。

まだまだ、こういった取り組みの認知、担い手は、日本国内では多くないと感じています。ぜひ地域を越えて、共感してくださる方々と連携しながら、やがて大きなムーブメントになるよう努めていきます。東京だけでなく、仙台でのプロジェクトを可能にして下さった日本財団のご支援に心から御礼申し上げます。

及川多香子
NPO 法人アートワークショップ
すんぷちょ代表理事

ＴＰＮドラマ教育ライブラリー

No.1
「ドラマ教育を探る 12 章」　著／中山夏織　発行／2007 年 6 月 1 日
A5 版　74 頁　　頒布価格　1,200 円（送料込み）
No.2
「人材育成を探る 12 章」　著／中山夏織　発行／2008 年 9 月 1 日
A5 版　84 頁　　頒布価格　1,200 円（送料込み）
No.3
「ドラマ教育―倫理と展開」（ドラマインエデュケーション 2008 報告書）
発行／2008 年 11 月 15 日　A5 版　98 頁
頒布価格　800 円（送料込み）
No.4
「青少年の未来とアートマネジメント」（学校と芸術をつなぐ実践ストラテジー報告書）
発行／2009 年 12 月 25 日　A5 版　68 頁
頒布価格　800 円（送料込み）
No.5
「クラウン―ユーモア、エデュケーション＆ヒューマン☆パワー」報告書
発行／2010 年 11 月 15 日　A5 版　46 頁

お問合せ・お申込み　メール tpn1@msb.biglobe.ne.jp

ＴＰＮドラマ教育ライブラリー6

オイリーカートに学ぶ
インクルーシブ・シアター

報告書

編著　特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク
発行日　2016 年 12 月 25 日

発行者　特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク
〒182-0003　東京都調布市若葉町 1－33－43－202
Phone & Fax 03-5384-8715
http://www5a.biglobe.ne.jp/~tpn

印刷・製本　有限会社ニシダ印刷製本

©2016 Theatre Planning Network　Printed in Japan
本書の内容の無断転写・複写および電子媒体への入力はお断りいたします。

頒布価格　1,000 円

特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク

Supported by
日本財団
THE NIPPON FOUNDATION